

京都・長岡京跡(1)

- 1 所在地 京都府向日市鶏冠井町馬司・上古
- 2 調査期間 一九八四年(昭59)五月～七月、九月
- 3 発掘機関 向日市教育委員会
- 4 調査担当者 山中 章
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 長岡京期(八世紀末)
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
- 一九八四年に長岡京跡で木簡の出土した調査は四件あり(左京三件、右京一件)、他に京南郊で平安初期の調査一件がある。その発掘調査は四機関にわたってい
るが、本稿は、向日市教育委員会が担当した一調査地の報告である。
- 一 左京南一条三坊四町
(左京第一一二二次調査7
ANEUK地区)
- 調査地は四町のほぼ中央部に位置する。長岡京期の



(京都西南部)

(1)

「采采

8 木簡の収文・内容

一 左京南一条三坊四町

器、「内□」と記した墨書土器のほか、人形、櫛、種子等がある。

市道上に移設された水道管理埋設工事に伴う立会調査として実施したものである。偶然工事施行位置と、南一条第二小路北側溝SD八四四九〇七とが重なったため、七五mにわたって側溝を確認することができた。溝の規模は不明であるが、溝は一度に埋め立てられており、木簡はこの中から一点出土した。

共伴した遺物には、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、土師器、須恵器、「内□」と記した墨書土器のほか、人形、櫛、種子等がある。

主な検出遺構には、北西から南東に町内を横切る自然流路SD一一二一〇と、この流路に直交して設けられた柵状遺構SA一一二一九がある。木簡はこの流路南東岸近くの柵付近で一括して出土した。自然流路SD一一二一〇は、弥生時代中期初頭からこの付近を激しく流れていた川の名残りで、長岡京期には水の殆ど流れない湿地状の流路と化していた。その規模は幅約四〇m、深さ〇・一mを測る。共伴した遺物には、平瓦、土師器、須恵器、「進」と記した墨書土器、木製品では曲物等がある。

二 左京南一条一坊十四町(左京第八四四九次立会調査7 ANEJK 地区)

(128) × (25) × 3 061

〔錢
カ〕

(2) 東□

(3) □

(4) □

(5) □五男□
(6) □紀□
(7) 現□
(8) □水水□

091

091

091

091

091

これらその他、削屑約二〇〇片が出土している。(1)はほぼ完全に残る曲物の側板に記されたもので、文字は二文字のみであった。(4)の二行目第一字・第三字は旁が各々「音」「里」と判読できるが、偏についてとは判読不能である。(1)以外は全て削屑で、細片のため判読不能のものが大部分である。内容は複数行の文書風のものと習書が目立つ程度である。

目立つ程度である。

二 左京南一条二坊十四町

(1) □
・ 田□

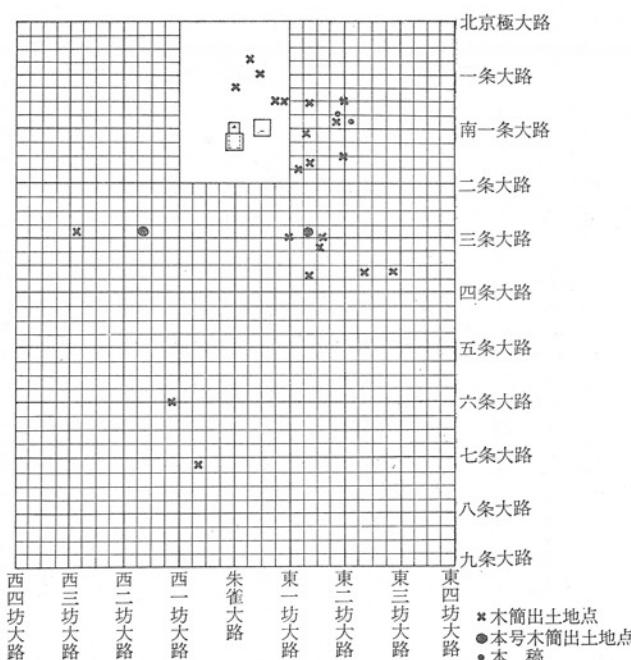
091

・ □通通

(33)×(17)×0.5 081

上下端折れ、左右辺割れ。表裏の文字が透き通つて見えるほど薄く削られた材である。表は割り書の一部で、田□は人名か。裏は習書である。

(清水みき)



長岡京跡木筒出土地点図